

幼児の精神発達と絵本

The Development of Young Children through Picture Book Experiences

(2005年3月31日受理)

尾崎 恭子

Osaki Kyoko

Key words : 絵本, 幼児, 精神発達, 想像力, 指導上の留意点

要 約

幼児教育において「絵本」は重要な保育内容の1つとして位置づけられているが、絵本は幼児の精神発達にどのような役割を果たしているのだろうか。本研究の結果は、幼児の絵本体験における発達を根底から支えているのが、“想像力”であり、しかも、それらの想像力が創造性や発明、発見へとつながっていくことが明らかになった。また、絵本を通して子どもたちの想像力を思いっきり飛翔させ、“感動”する心をくり返し体験させるためには、読み手である保育者の感動とともに、すぐれた絵本の絵と文が子どもたちの想像力を豊かにするための大きな役割をになっていることが分かった。そうした観点から、保育者はどのように絵本を選んだらよいかについて、文については5つのポイント、絵については10のポイントを具体化した。さらに、絵本の読み方をどのように工夫すればよいかについては、9つのポイントを具体化した。最後に、「ぐりとぐら」の絵本の実践例から、絵本を通して生活体験をより広げ、絵本の楽しみをより深めるための保育者の言葉かけや手立てを明らかにした。

はじめに

一般に幼児は絵本が大好きであり、自分の好きな絵本を何度でも「読んで、読んで」とせがむのは保育現場でよく目にする子どもの姿である。絵本の読み聞かせは、幼稚園や保育園でも毎日のように行われているが、絵本は乳幼児の精神発達にどのような役割を果たしているのだろうか？

例えば、乳幼児の発達と絵本について、保育所保育指針には、次のように述べられている。

- ① 1歳3か月から2歳未満児では、言葉を話すようになり象徴機能が発達してくること、興味ある絵本を保育士と一緒に見ながら簡単な言葉の繰り返しや模倣をしたりして遊ぶこと
- ② 2歳児では、さらに象徴機能の発達が増し、絵本や

紙芝居を楽しんで見たり聞いたり、繰り返しのある言葉の模倣を楽しめるようになること

- ③ 3歳児では、絵本や童話などの内容がわかり、イメージを持って楽しんで聞くけるようになること
- ④ 4歳児では、無生物までも自分と同じように心があると思っており、子どもらしい空想力や想像力が発達すること
- ⑤ 5歳児では、絵本や童話等の内容を子ども自らの経験と結びつけたり、想像をめぐらしたりしてイメージを豊かにできるようになる、といったことなどがそれである。

そこでまず、本研究では、幼児期の子どもの精神発達において絵本はどのような役割を果たすのかについて検討し、次に、そのような豊かな発達をうながすための保育者の指導上の留意点について検討する。最後に、それ

らの留意点にもとづいて取り組んだ「ぐりとぐら」の実践例から、保育者の言葉かけと手立てについて述べることにする。

幼児の精神発達と絵本

(1) 心身の発達における幼児期の特徴

身体の発育の面から乳幼児期が非常に重要な時期であることは言うまでもないが、精神発達の面でも、古語に「三つ子の魂百まで」と言われている通り、そのことが科学的に真理であることが証明されるようになった。即ち、フィスターは人の脳髓の重量は6才になると成人のほぼ88パーセントにも達し、乳幼児期の精神発達がいかに目ざましいものであるかを教えている。幼児の精神生活の中心をなす情緒の分化発達も、その重要さにおいて後のどんな時期におけるよりも大切な時期であることがわかっている。また、ブリッジスは、情緒がほぼ2才頃までに基本的な分化をとげ、およそ5才頃までに大人とほぼ同じ程度の情緒が分化し終り、その人の心情の美しさや性格の基本的傾向を形造ると報告している。そのような意味で、知性の教育と情操の教育は健康教育と並んで、幼児教育の最も大きな柱でなければならないのである。

(2) 幼児の世界観と想像性

幼児は、動物や植物はいうまでもなく石ころや棒きれのような無生物にいたるまで自分と同じように心があり生命があると思っている。又、自分の頭の中で考えたことが客観的にも存在していると思ったり、夢の中の出来事が本当にあるものだと思ったりしている。汎心性とか実念論とかよばれる一連のこうした幼児心理の特性は、20世紀の巨人と呼ばれたスイスの心理学者、ピアジェの業績によるものであるが、このことはあわせてどうして子どもたちがこれほどまでに絵本や昔話の世界にひたきることができるのかについて私たちに教えてくれる。

現に絵本の中では、動物どうしが言葉をかわし、人間と動物はおろか、植物とすらも言葉をかわし、おたがいの心をかよわせている。そういった主人公たちの登場は、子どもたちにとっても決して“バカらしい”ことではないのである。

このような幼児の世界観は、幼児のものの見方やかわり方の中心をつらぬいている“自己中心性”や“未分化性”にもとづくものであるが、いわば、大人の客観的で知的な世界観に比して、きわめて主観的で情緒的な色彩の濃い世界観とすることができるであろう。

ところで、このような幼児の世界観を根底から支えているのが、想像性とか“想像力”と呼ばれるものである。したがって、幼児期に特徴的なこうしたものの見方やかわり方は、幼児がたやすく他者に“感情移入”させ、それと一体になり得ることを物語っている。チョコフスキーはさまざまな子どもたちの言葉を引いて、事物の本質をとらえるこの驚くべき“小さな詩人”たちの詩人たるゆえんを説明しているし、日常の保育にたずさわる保育者も「マッチ売りの少女」に涙する子どもたちの純粋な心情の美しさを経験している。

しかし、幼児期のこうした心理的特徴は、ほぼ7才頃を境として終わりを告げる。それだけに、この時代の教育がなににもまして情懐豊かな人間性を育てる教育でなければならないのである。

(3) 絵本と想像力

いつの時代にも、お話や絵本に見聞きいっている子どもの真剣なまなざしに、ひそかな驚きと深い感銘を経験しなかった保育者はいない。子どもたちの耳は保育者の声を聞きのがすまいとそばだてているし、子どもたちのまなこは作中の絵本をとらえて離さない。これほどまでに子どもたちの心を夢中にさせるいわば“メルヘンの妖精”ともいうべきこうした幼児の想像力について、松居はその著「絵本とは何か」の冒頭でこう述べている。

“本を読むには字が読めるということより、もっと別の力があるのではないのでしょうか…。字を読む力だけでは読書ができないとすれば本を読むにはどんな力が必要なのでしょうか…。

一寸法師のお話を真剣に聞きいっている子どもは、一寸法師が心の中にちゃんと見えるのである。そして一寸法師がおわんの舟に乗ってはしのかいをこいで川を上り、都へついてお姫さまに仕え、そのお供をしてお寺参りをし、鬼を退治して打ち出の小づちを手に入れ大きくなってめでたくお姫さまと結婚するという物

語の世界が、はっきりと絵、イメージになって心の中に見えるのである。一寸法師の短編映画が心の中に映っているのである。”

むろん子どもたちは、生まれつき豊かな想像力を身につけているのではない。それだけに読み手である保育者の感動とともに、すぐれた絵本の絵と文が子どもたちの想像力の育成に大きなかわりを持ち、子どもたちの想像力を豊かにするための大きな役割をになっているのである。

(4) 想像力と創造性

絵本の世界に限らず、一瞬にして一枚の葉っぱをおチャワンに、一本の棒きれをかわいなお馬にすることのできる小さな“魔法使い”たちは、一方でそのような想像の世界を自分なりに現実化したい欲求を持っている。保育者が子どもたちの遊びの中でしばしば発見する絵本の登場者たちの言動や行動も単なる模倣ではなく、こうした子どもたちの心理的側面の表出であるといえる。このような視点からすると、読み聞かせから遊びへと発展させていく活動は、子どもたちの豊かな発達をうながすことへとつながると言える。子どもたちはウルトラマンになって遊び楽しんでいると同時にまた、ウルトラマンのように強くなりたいのである。そして、そのような子どもたちの現実化への欲求こそが、実は“創造性”と呼ばれるものの本体なのである。かのライト兄弟は少年時代、鳥のように空を飛んでみたい想像力をみごとに飛行機というもので現実化したのである。チョコフスキー（1973）は次のように言っている。

“ダイナマイトの発明に必要なのは、まさに大胆な想像力だった。想像力は人知の最も貴重な要素だ。だから想像力は音楽の感覚を育てるように幼児の頃から十分にはぐくむべきで、決してふみにじってはならない。……カールマルクスも郊外散歩のおり娘たちに道々お話を作り出し、残っている道の距離に応じて出来事をひきのばしたりちぢめたりしながら、おもしろい架空物語をしてやった。…ダーウィンだって、子どもの頃は空想家で、ミュンヒハウゼンに劣らぬほら吹きとされていたものだ。”

あらゆる意味で想像力は創造性の母であり、発明、発見の母なのである。しかも想像する心、夢みる心は、幼児の最も幼児たるゆえんのものであり、幼児の生命力といっても過言ではない。保育者は、大空を飛ぶ鳥の翼さにも似たこの想像力を大切に守り育てていかなければならないし、ほかならぬ子ども自身が何にもまして、このような願望が満たされることを望んでいるのである。古来“3才児ほど動けば蔵が立つ”といわれるほどのバイタリティーを秘めた子どもたちの“見たい、聞きたい、知りたい、やってみたい”という好奇心や探究心も、実はそこから生まれているのであり、そういった意味でこの“遊びの発明の天才たち”の願望をみたくす最もふさわしいもののひとつがよい絵本であり、絵本の世界なのである。絵本を読んでもらっている時の子どもたちの目の輝き、保育者に何回も何回も「もう1回よんで！もう1つよんで！」とせがむ子どもたちの秘密もそこにあるのである。

子どもたちにより絵本を与え、保育者がよい読み手であることによって、子どもたちの心は安らぎと悦びに満たされるのである。しかも、子どもたちはこうした絵本の楽しさの根底に確かな保育者の“愛情”を感じとっている。絵本はあらゆる“絵本の副産物”に先行して、子どもたちにとって“楽しい”ものでなければならない。いたずらな註釈や説明は、子どもたちの想像力をこわし、絵本の本当の楽しみを奪い、結果的に子どもたちを絵本から遠ざけてしまうのである。子どもたちの想像力を思いっきり飛翔させ、“感動”する心をくり返しくり返し体験させることによって、子どもたちの心は豊かに育っていくのである。そして、ほかならぬその“心の豊かさ”こそが、人間のあらゆる行為の規範となって、人間の住む社会を愛と思いやりに満ちたものにしていくのである。そういった意味で、よい絵本は、21世紀をになう子どもたちの健全な精神の成長と明るい未来を約束するもっともふさわしい文化財のひとつといえるだろう。

絵本における指導上の留意点

先に述べたような、豊かな発達を促すためには、保育者はどのような点に留意して絵本の選定や読み方の工夫をすればよいのかについてまとめると、次のようになる。

(1) 絵本の選び方

①絵について

- ・内容を端的に表し、絵を見て大体の筋がわかるもの
- ・子どもの感覚に合っており、理解しやすいもの
- ・絵が正確で、漫画的でないもの
- ・ものの動きを十分に表現した絵を持つもの
- ・美しく色彩豊かな絵で、げげばしくもないもの

②文について

- ・わかりやすく内容を正確に伝えているもの
 - ・子どもにとって、使われている言葉の70~80%くらいがわかるもの
 - ・絵と説明文が、ほどよく調和しているもの
 - ・筋がはっきりしており、内容の展開に不自然さがないもの
 - ・文の長さ、リズム、間などに十分な配慮がなされているもの
 - ・文字、かな使い、用語などに適当な考慮がはらわれているもの
 - ・残酷性がなく安心感をもって終っているもの
 - ・原作に忠実なもの
 - ・読みつがれ、語りつがれてきたもの
 - ・子どもの世界や生活感覚があるもの
- #### ③創作態度や造本などについて
- ・子どもに対する正しい愛情があるが、単なる商業主義でないもの
 - ・子どもに興味や関心のある題材が選ばれているもの
 - ・子どもの創造力、思考力を伸ばすもの
 - ・製本が堅牢なもの
 - ・レイアウトが適切なもの
 - ・開き具合が自然なもの
 - ・印刷が鮮明で、文字の大きさ、書体が適当なもの

(2) 絵本の読み方

- ・体型は左側斜交いに構えて、絵本をのぞき込むように

する。

- ・絵本の持ち方は、左手を本の下部の中央に、中指で押し、肘をあげて右手でめくる。
- ・絵本型の保育形態に座らせる(扇型)
床に体操座りの時保育者は椅子、椅子の時は立つ。
- ・ゆったりした暖かな雰囲気のもとで、おおげさにならない程度に、豊かに意味や文脈が表現できるように読む。
- ・声の大きさ、抑揚(強弱、高低)、テンポ、間(休止)に留意して読む
- ・めくった瞬間には読まない
- ・読んでいる最中の大人からの説明や質問はしない
- ・ゆったりとした雰囲気の中で、毎日読む習慣をつける
- ・一時的な教育効果をねらわず、何よりも絵本の楽しさや読み手(保育者、親)と聞き手(子ども)とのふれあいを楽しむ気持ちで読む

絵本「ぐりとぐら」の実践例

M保育園(福山市)4歳児クラスで10月に取り組んだ「ぐりとぐら」の実践から、読み聞かせから遊びへと展開していく保育者の言葉かけと手だてをまとめると、次のようになる。

(1) 絵本の読み聞かせ

①1回目の読み聞かせ

保育園のまわりの山にはどんぐりや木の葉など子どもたちが興味をもつ自然物がたくさんある。「ぐりとぐら」の読み聞かせをすると、子どもたちは大変興味を持って集中して聞き入っていた。そのあと、どんぐり拾いに出かけると1人の子が「ぐりとぐらみたいに卵が見つかるかもしれないよ!」と言ったことから、いつのまにか「ぐりとぐら」の卵探しになった。「卵ないなあ。」「あそこにあるかな。」といろんなところを探し回り、ぐりとぐらのお話の世界がいつしか現実の世界となって楽しむ姿があちこちで見られた。

②2回目の読み聞かせ

子どもたちがぐりとぐらになって楽しむ姿から、もう1度読み聞かせをすることにした。表紙をみると、「こ

の本知ってる。「早く読んで！」とうれしそうに言った
り次の場面を予想したりする姿が見られた。読み聞かせ

の様子をページにそって、保育者の言葉かけと手立てと
子どもの反応を対応させてまとめると次の通りである。

ページ	保育者の言葉かけと手立て	子どもの反応
p. 2~3	ぐりとぐらの歌を歌いリズムカルな言葉を楽しめるようにする。	保育者の歌について楽しそうに歌い出す。
p. 4~5	「みちのまんなかにとってもおおきな…」で、間をとってページを開き、卵に期待をもたせるようにする。	「とってもおおきな…」から数人の子どもが保育者に続いて文章を言う。
p. 6~7		この辺から次の場面を予想して言ったり、会話の部分は文章を覚え、保育者に続いて言ったりする。
p. 10~13	カステラの材料、道具など注意して見るよう指しながら読む。	保育者の言葉に続いて、材料や用具の名前を言う。
p. 21~23	「さあ、できたところだぞ、ぐらがおなべのふたと…」でページをめくり、大きなカステラに関心をもたせる。	
p. 24~25		「海の動物がいる」「わに」「かに」「へび」「かえる」「かたつむり」など森に住んでいる動物ではないと言い出す。
p. 27	読み終わり子どもたちと話し合う。 「みんなもつくってみない？」 もう1度絵本を見ながらどんな材料や用具があるかについて話し合う。 「じゃあ、明日みんなで山にたきぎや石を拾いに行きましよう。」	「大きなカステラおいしそう」「大きな卵でないといけないのは作れないよ」と口々に言う。 「わーい」と歓声上がり大喜びする。 「リュックサック」「牛乳」「卵」「フライパン」など待ちきれない様子。 1人の子が「たきぎがあるよ」と言うと「たきぎがないと焼けないよ」「かまどをつくるのに石もいるよ」と次々に言う。 みんな大喜びで賛成する。

(2) たきぎひろい

子どもたちは登園すると家から持ってきた材料をうれ
しそうに見せ合っている。子どもたちは、保育者が部屋

に貼っておいた用具や材料の絵を見ながら机の上に分類
して並べた。

幼児の活動	保育者の言葉かけと手だて	幼児の反応
持ってきた材料の名前を言う。	「みんなどんな物を持ってきたの？」	机の上の並べた材料を見て、「わあ、卵が一番多い！」と言う。
材料の足りない物を考える。	「何か材料で足りないものがあるかしら？」	絵を見て「フライパン」「ボール」と言う。
山へたきぎあつめに行く。	3つのグループに分かれて、グループで協力して拾うよう言葉かけする。 「よく燃える木をみつけてね」とたきぎの大きさ、種類など燃えやすい木を拾うようながす。	たくさん集めようとグループみんなで協力して拾う。たきぎを拾いながら「先生、ここでカステラ作ったらいいよ！」「この山は動物がこないよ。」「でもうちのウサギが3匹逃げたのがここにくるかもしれん」「ねこもくる」「かまきりも」と会話ははずむ。
拾ったたきぎを集め乾かす。	「ここが広いから、ここでカステラを作ることにしましょう。」	「わーい」「それがいい」とカステラ作りに期待をふくらませる。

(3) カステラ作り

かまどの用意、カステラ作りに必要な机などの環境設定を保育者がしておく。それから、子どもと一緒に材料をもって山に登り、かまどのまわりに集まる。かまどの

火のつけ方を保育者が説明すると、子どもたちは興味深くじっと見つめる。3カ所のかまどに火がつき用意ができたところで、カステラ作りが始まった。

幼児の活動	保育者の言葉かけと手立て	幼児の反応
順番に材料の名前を言いながら、保育者が材料を入れるのを見る。	材料の順番を子どもと一緒に確認し、子どもが言うのに合わせて材料を入れていく。	絵本の文章と同じように「たまごをボールへながしこむと、おさとうといっしょにあわたてきでかきまぜて…」と声をそろえて言う。
材料をこねる。	6つのボールに材料を入れ、グループで協力してこねようながす。	
材料をフライパンに流しこみ焼く。	熱いのでフライパンにバターをぬるのは保育者がする。 安全面に気をつけて、仕事を分担してみんなで作るよう言葉かけする。	材料を流し込む子、ひっくり返す子、歌いながら焼けるのを待つ子など、どんなカステラが焼けるか期待に満ちた表情で、焼ける様子を見ている。 焼き上がると「できた！」とみんなが一体となりうれしそうに言う。
出来上がったカステラをみんなで食べる。	切ったカステラをお皿に入れる。	自分たちで作ったという満足感や喜びでいっぱいの表情である。「どんな味かなあ」と興味深そうに口にする。「わあ、おいしい!」「ホットケーキみたい!」とみんなおいしそうにたくさん食べた。
使った用具をあらったり、後かたづけをする。	「ぜんぶきれいになったかな?」と声をかけ、みんなで協力して最後まで片付けるようながす。	いつもは片づけをいやがる子ども、自分たちですんでかたづけ、きれいになるまで協力して片付けていた。
使った用具をもって保育園に帰る。	「みんなカステラ作り上手だったわね。とってもおいしかったわ。」	「もう1回作りたい!」「明日も作ろう!」と口々に言い、まだ作りたい様子である。

(4) 実践のまとめ

読み聞かせからカステラ作りへと発展した「ぐりとぐら」の活動は、子どもたち全員が終始積極的に楽しみながら取り組み、充実した経験であると共に、絵本の楽しさを心から味わえる経験となった。物語の生き生きとした口調のリズム、さし絵の言外に語る物語性、テーマへの親しさ、絵と文のみごとな展開がもたらす作品の流れと構成は、子どもたちの願望と空想を引き出し、子どもたちの想像力を刺激して、いつしか物語の世界へとおきかえ、自分たちがぐりとぐらになりきって楽しんでいった。この実践から、「絵本を通して子どもたちの生活体験を広げより豊かなものにする」と同時に、その絵本をより深く味わい楽しむ」という経験が子どもたちの心を豊かにすることがわかった。そして、なによりも、1冊のよい絵本との出会いが重要であることがあらためてわかった。

おわりに

「絵本」は子どもの心、情緒の発達において欠かすことの出来ない重要な保育内容の1つとして位置づけられている。今回そのような視点から、絵本が幼児の精神発達にどのような役割を果たしているのかを検討した。その結果、幼児の世界観を根底から支えているのが、“想像力”と呼ばれるものであり、想像の世界を自分なりに現実化したいという欲求から創造性が生まれ、発明、発見へとつながっていくことが分かった。さらに、子どもたちの心は豊かに育てていくためには、子どもたちの想像力を思いっきり飛翔させ、“感動”する心をくり返しくり返し体験させることが大切であり、読み手である保育者の感動とともに、すぐれた絵本の絵と文が子どもたちの想像力を豊かにするための大きな役割をになっている。

る。

そうした観点から、保育者はどのように絵本を選んだらよいかについて、文については5つのポイント、絵については10のポイントを具体化した。さらに絵本の読み方をどのように工夫すればよいかについては、9つのポイントを具体化した。これらのポイントにもとづいて、子どもたちに人気のある絵本「ぐりとぐら」を取り上げ、読みきかせから総合的な活動へと展開した。この実践例から、絵本を通して生活体験をより広げ、絵本の楽しみをより深めるためには、保育者の言葉かけや手立てが重要であることがわかった。子どもたちにとって、何よりもよい絵本との出会いが重要であり、保育者の言葉かけと手立てがよい絵本との出会いを作る大きな役割を果たしている。

今後はさらに子どもの年齢や発達に応じた指導上の留意点やより絵本体験を豊かにするための活動内容について具体化していきたい。

参 考 文 献

1. ピアジェ, J 児童の世界観 同文書院 1955
2. ピアジェ, J 表象の心理学 黎明書房 1969
3. 松井直 絵本とは何か 日本エディタースクール出版部 1978
4. チュコフスキー, K. 2歳から5歳まで(普及版) 理論社 1996